

ヴィクトール・プルヴェによるイッシー=レ=ムリノー庁舎装飾画《人生》
——慈愛像と楽園図像の社会的文脈——

原田佳織（お茶の水女子大学）

ヴィクトール・プルヴェ（1858-1943）による装飾画《人生》（1897年）は、パリ南西の郊外イッシー=レ=ムリノーの庁舎階段のために旧セヌ県から受注し制作された。連続する三つの壁面を覆うフリーズ状の画面中央に母子と家の建設場面、左画面に幼い子どもを抱き上げる労働者の夫婦が描かれていることから先行研究では、第三共和制による家族単位の重視と出産奨励の文脈との結び付きが示唆された。本発表では、生成過程を含む具体的な図像分析を通して、本作と伝統的寓意像との関係を新たに指摘し、その上で壁画全体が提示する社会的な意味を解釈する。この考察により、従来循環的生命の表現と象徴主義的に解されてきた19世紀末美術の人生の諸段階の主題の社会的側面を明示する。

先行研究は、画家が後年妻と子の写真を用いて描いた《生きる喜び》（1904年）と本作を並列し、家族像を描く側面を強調したが、アトリエでモデルとその写真を用いた本作の制作過程には極めて意図的な人物構成が認められる。本発表では、中央の人物像が複数の子どもの世話する母親像であると同時に果物を採る女性像であることに着目し、この図像に「慈愛」の寓意像と楽園図像としての性質を新たに指摘する。

まず「慈愛」像としての特徴は、従来看過されてきたプルヴェ自身の先行作品との図像の一致により裏付けられる。《人生》中央の母子像は、『ロレーヌ・アーティスト』誌（1894年）に詩「みなしご」の挿絵として掲載されたプルヴェの母子像を反復している。この母子像は、同時に掲載された16世紀頃の宗教的な「慈愛」像彫刻の模写とともに、孤児支援という慈善事業の呼びかけを目的として、社会的な慈愛の観念を喚起するものであった。本発表では、この図像の使用の背景にプルヴェの傾倒した連帯主義の社会思想の存在を指摘したい。

一方で木の実を採る女性像は、本作の受注を導いたプルヴェのパリ市庁舎食堂装飾応募作《果物》（1893年）から「豊穡」の主題を引き継いでいると同時に、聖書的な楽園の図像を連想させる。19世紀後半の西欧美術に流行した楽園図像は、宗教的図像を下敷きにしつつ、当時の社会問題と結び付いてユートピア的なイメージを提示した。プルヴェは原罪の観念を表すよりも、個々人が異なる世代や周囲の環境と調和を成す牧歌的な理想郷イメージを示した。年長者と若者の図像が画家の共有した民衆教育の思想に沿うことも指摘したい。

以上の分析を通して、従来考えられていたように労働者の姿を写実的に表すのみでなく、図像の伝統を踏まえたプルヴェの制作のあり方も明らかとなる。この点で本作は、伝統的寓意像と写実主義という二極化した第三共和制期の区庁舎装飾の表現傾向の双方を折衷する。産業発展目覚ましいパリ郊外の庁舎に相応しい理想郷イメージは、社会思想に基づく伝統図像の改変によってこそ実現されたことが理解されるだろう。